

子どものための組曲 (1964年作曲 日本音楽集団委嘱)

すっぴんの美女 長澤作品



鞍掛昭二 (日本音楽集団創立メンバー・日本福祉大学名誉教授)

長澤さんは終戦後の抑留キャンプでは演芸隊の楽長として、また帰国後に参加した人形劇団ブークと、後に同人として創立した日本音楽集団では共に座付作曲家として生涯実践派、現場主義を貫いた人。作曲の師事をした清瀬保二氏から教わったのは作曲する心。「本当に自分の言葉で自分のことを言うこと」。それは「とても勇気の要ること」だが長澤さんは厳しくそれを守った。1964年11月、集団の第一回定演(丸の内第一生命ホール)で「子どものための組曲」を「私達の目指す音楽は具体的にはこの曲です」と勇気を持って差し出した。飾りなく、潔く、耳に直ぐ馴染み、聞き飽きない快さで心を癒すこの組曲は多くの人の心を捉え、多くの団体によって演奏され、40余年を経た今現代音楽の古典の位置にある。

《第1章》長澤さんはメロディーの人と言われているが、長澤さんのリズムも底力を秘めている。第1章では箏群を中心とした快いリズムが休まず流れ、2分足らずの短い曲だが定速進行して立ち止まらない爽快さのうちに曲は終る。

《第2章》元々は東京尺八三重奏団のために作曲された三重奏曲の第2楽章。それが「とても気に入った」長澤さんがこの組曲の第2章に嵌めこんだもの。明るく少し翳りを持った民謡風のメロディーが縋り合わされているが、脈動のような拍節感が感じられて曲の流れを自然に捉えることができる。

《第3章》二つの木魚の柱時計の振り子のような刻みに乗って次々と楽器が参加する。楽器の呼び交わしあう掛け合いの中に旋律が紡がれて行く。長澤さんは掛け合いの天才でもある。

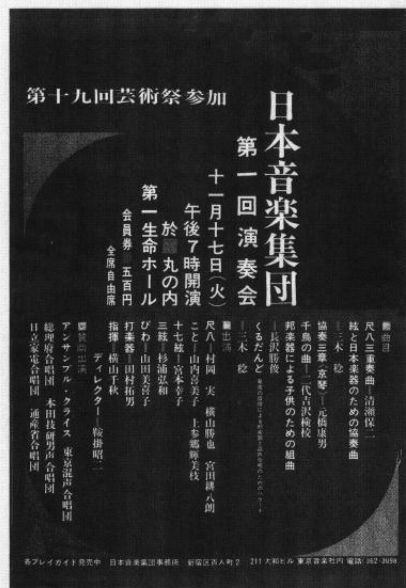
子どものための組曲の「子ども」とは…。恐らく長澤

さんのイメージは長年座付き作曲家として向き合ってきたブークのお客さんの子どもたち。人形の演技に敏感に反応して時には踊りだす感性の優れたバイタリティーに溢れる子どもたち。それと、長澤さんが大人になってもずーっと持ち続けてきた少年の心。

《第4章》遊び疲れてぐっすり眠り込んだ子どもたちへの子守唄。箏と琵琶の眠気を誘う導入に尺八のやさしい子守唄。中間部は昼間の遊びの夢だろうか。心を解き放して遠くへ運んでくれるようだ。そして再び眠りが訪れる。

《第5章》神事や祭りを除いては主に脇役をつとめてきた和太鼓がこの章ではステージの主役となって初めと終りを司っている。「タンタカタタカタタタタ」という力強いリズムが要所を締め、東京オリンピックのアベベの走りを見ながら書いたという伝説のじょんがら風三弦のソロが躍動する。祭りの笛を思わせる尺八の中間部が朗々と鳴り渡ると再び全合奏に戻って、余韻を残しつつ曲は終る。

この組曲を聴いていると集団結成の頃から何年間か練習に通った正派音楽院の道場を思い出す。正派邦楽会家元の中島雅楽之都(うたしと)氏は愛弟子の宮本幸子さん(箏・十七絃)が集団の創立メンバーであったご縁から、「流派を超えて邦楽器のアンサンブルを目指す」私たちに道場を開放し、おおらかに援助してくださった。集団はこういう方々に支えられ背中を押されて育ってきた。正派の道場で時には車座になって話し合う輪の中に私達の青い議論を優しく受け止めてくれる長澤さんの存在がいつも在った。合掌。



「日本音楽集団第一回演奏会」ポスター



「子どものための組曲」収録LP



「子どものための組曲」収録CD